農村歌舞伎の復活上演をする

島根県佐田町・出雲歌舞伎むらくも座

今年で七回目になる島根県佐田町須佐温泉「ゆかり館」での『むらくも座湯けむり芝居』の演目は、講談や浪曲では、「甘酒茶屋」の名でつとに名高い、赤穂浪士神崎与五郎と馬子丑五郎のお話。題して「義士外伝神崎与五郎東下り（二幕）」。

舞台は箱根山中の茶屋。江戸に下る神崎与五郎が風景を愛でながら、ひと休みしている。そこへ近在でも乱暴狼藉者として評判の丑五郎がやってくる。馬子である丑五郎は、姿凛々しき神崎を道中の安全を考えて、武士の扮装をしている旅役者と思い込み、しつこく馬をすすめる。しかし神崎は断る。断られた丑五郎は、悪態の限りをつく。神崎は思わず刀の柄に手をかけ斬ろうとするが、大事の前の小事と、五両の金子を渡し、詫び証文を書き、穏便におさめる。そこまでが第一幕。

第二幕では、その後、丑五郎は江戸から来た講談師から、かつて悪態をついた相手が赤穂義士の一人で、見事主君の仇を討ち、切腹し、すでにこの世にいないことを知らされ号泣する。そして、周囲の人たちの好意で托鉢僧の支度を整えてもらい、与五郎の菩提を弔うため、江戸の泉岳寺に向かう。

二幕でおよそ一時間三十分。この間、百人を超す観客は、料理を食べつつ、お酒を飲みつつ、時には、合いの手を入れ、おひねり投げ入れ、舞台に魅入っている。

たぶん昔の農村歌舞伎もこうだったのだろう。

舞台こそ、四間から八間ほどの立派な舞台にかわったものの、秋祭りなどに近在の人たちがごちそうをつめた重箱やお酒やゴザを持って集まり、村の顔なじみの衆が演ずる農村歌舞伎を、時には冷やかしや合いの手を入れ楽しんだのだろう。戦前、戦後の昭和三十年代前半までは全国各地で見られた農村の点景であったといえる。

ここ佐田町でも、起源は定かでないというが、大正時代から、農村歌舞伎が集会所でさかんに演じられていた。むらくも座の座長で今回丑五郎役の渡部良治さんや浪曲や化粧を担当していた長島浜吉さんたちは、子ども時代にこの農村歌舞伎に心をときめかせたという。しかし、昭和三十五年の上演を最後に、この歌舞伎は、担い手不足により途絶えてしまう。

十数年後、子ども時代に観た歌舞伎への思いがわすれられない渡部さんたち青年団の面々は、むらくも座を旗揚げする。残された台本や記録を解読、欠けたところは補い新たな台本を作る。かつて歌舞伎に携わった人たちに演技指導を受け、昭和五十年に、中央公民館で復活上演を行なう。以来三十年。毎年秋の定期公演では、旧作を掘り起こし上演していく。その演目は三十までになっているという。今回の義士外伝も五十年ぶりの上演となる。公演先は、県内はもとより、県外さらに外国までにひろがっている。山陰地方や中四国地方にある農村歌舞伎団体とのジョイント公演なども企画、実演している。出張公演の際には、上演とあわせて、町のPRもわすれない。

演目も増えるにしたがい、かつら、衣装、大道具などの費用も膨大なものになる。なかには、百万円を超える衣装を揃えることもあるという。「ときどき金融機関のお世話にもなっています」と言うように経費のやりくりは並大抵の苦労ではないだろう。

公演前夜、最後の通し稽古が行なわれた。このときにはセリフや動作を忘れ、立ち往生する場面も何回かあった。「本番で間違えたら突っ込むからね」とすかさず仲間から冷やかしが飛んでいた。しかし、昼と夜の二回の本番では、一度も立ち往生することなく進行する。もちろんアドリブでこなした場面もあるのだろうが、舞台の魅力にとり憑かれた面々の力強さを感じた。

連絡先

佐田町文化協会内

島根県佐田町
大字反辺1747-6

TEL　0853-84-0019

EXPLORER